
その瞳に映る先に

来栖川 大輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その瞳に映る先に

【NZコード】

NZ8387E

【作者名】

来栖川 大輔

【あらすじ】

家族旅行に出ていた伊吹家だが、突如謎の大爆発が起きる。息子である誠だけは生存したが、父、母、妹は死んでしまった。九年後、この事件を調べ、犯人を探し出そうとするが…

序章 すべてはここから始まった

序章

それは過去に起きたたつた一人の少年の突然の悲劇の話。

山に車で家族旅行に出かけていたとき、ついいつた寝をしていた時だった。

ふとした瞬間。そう、まさに刹那と呼ばれる時間といえば良いだろうか。

一瞬の閃光と急激な衝突があり、気付いたときには車は大破し、少年はアスファルトに放り出されていた。

突然のことでのが起きたのか理解できなかつた。

少年は全身を激しく強打し、呆然と車や辺りを眺めていた。

家族は車の中に残されており、その車も原型を留めていなければ、人が生存できるとは思えない。

まして、辺りは火の海に包まれている。車から出る際に衝突したのが原因で、少年の意識も怪しい状況だ。

「どうせん… かあさん… あいか… ダレか…」

少年の意識が薄れてきたのか、体が心地よく眠りにつきやうになら。

「死ぬのかな…」

少年は死を覚悟した。周囲は火の海となり、逃げ道も無くなつた。何故こんな事が起きたのか少年には理解できなかつた。いや、理解したくなかったのもしれない。

なにせ目を開けたらそこは灼熱の炎につつまれ、家族もみな息絶えていたのだから。

しかし、その時奇跡が起きた。少年の耳に微かに、だけど凜とした声だったのは覚えている。

「the atmosphere : water : calm
a scorching flame」

何を喋っているのかは分からなかつたが、その声が発せられてたと同時に異変が起きた。空からの突然の突發的な大雨…いや、豪雨と言つた方が適切かもしれない。炎に包まれた辺り一面にだけ降つてゐる。

少年は意識を失う寸前だつたが、確かにその目で見ていた。そして、辺り一面の炎は数分のうちに消えた。

そして、最後に少年の目に映つたのは長身で細身の長い蒼髪で瞳が紅い女が居た。

少年の無事を確認するとそのままスッと居なくなつた。そして少年は意識を失つたとほぼ同時に救急車のサイレンが鳴り響いた。

この事件は全国の報道や記事にもなつた。また、他国でも一面に大きく掲載するほどの大事件だつた。当時の事件の被害状況等は以下の通りである。

死亡者約十七万人

行方不明者 約六万四千人

生存者…十二名

この生存者の中1人があの少年である。当時の少年は9歳。
名は伊吹誠^{いぶきまこと}

この事件がきっかけで伊吹は近隣の大手大学病院に入院、精密検査を受け、回復後、警察の事情聴取を受けることになる。

そして…伊吹の人生を決定した出来事でもあった。

第一話 伊吹 誠

そこは日頃誰も近寄らない校舎の裏だつた。真夜中の校舎の裏には月明かりだけが頼りで見える場所で、螢光らしきものはない。

月の光が当たらない所で何かが動いた。それは凝視しなければいや、凝視しても気付かないかもしない。それほど細かな変化だつた。しかし、細かな変化が僅かな時間をかけ大きな変化に変わつた。

そう…何もない空間からソレは現れたのだ。

空間を引き裂いたかのように突然現れたのはミニスカの女…というより制服を着た黒髪の長い少女だつた。

「あなたが、私を呼んだのですか…？」

消え入りそうな声だが、確かに少女は問い合わせた。その端正な顔からは表情に乏しく、少し怯えたように相手を窺う。

「そうですか…では今から私のご主人様ですね。^{マスター}わたし、カリンといいます。」

抑揚のない声と言つのだろうか。少女の声は消え入りそうで儂い感じがする。

「ではご主人様。^{マスター}」存知とは思いますが契約を結んで頂けないでしょ
うか？」

まるで少女の中でお決まりの定例文の如く契約の詳細を話していく。以前にも何度も契約をしたことがあるのだろう。とても分かりやすく、機械的だつた。

「ではご主人様、契約が完了いたしました。これによりご主人様と契約のため今後は一緒に同行させていただきます。」

「ああ。」

契約自体は一瞬で済んでしまった。お互いの額を合わせシンクロしただけ。しかし、この契約でカリンとの意識の共有が出来るようになつた。

「カリンだつたな。俺のこじまマスターなどと呼ばなこいつ。下の名前で呼んでくれ。」

一瞬カリンは何故?と疑問を浮かべたような顔つきをした。

「学校でマスターなどと呼ばれると変に思われる。下の名前で呼んでくれ。」

「…わかりました。誠様：いえ、誠さん」

相変わらずの抑揚のない声で聞き取りにくい声だった。

そして、その言葉を最後に一人は消えた。まるで一面の風景に溶けるようにゆっくりと消えた。

それは戌の下刻だった。

第一話 伊吹 誠（後書き）

かなり長い間事情があつて放置してましたが心機一転頑張りますので宜しくお願いします。

今回の章は物語の布石で書きました。特に進展も何もないです（汗）

第三話 女帝 神凪琴音

2009年4月6日 場所 夕凪学園 8：00

グラウンドに円形の人だかりが出来ていた。

およそ200人はいるだろうか。異様なまでの殺氣をだしながら円形の中心に立っている一人の美女を見つめていた。

美女の名前は神凪 琴音。かんなぎ ことね一番の特徴は187cmという女性にしては身長が高いと言つところと身長に比例した豊満な胸（一部の人間はこれが目的であつまつてたり）と神凪家に伝わる真紅の長剣…緋歐ひおうだ。

この緋歐は琴音とほぼ同等の長さであり、学園内で現存する剣の中では最長である。

「神凪～くたばれえやあ～。」

緊迫した空気が張り詰める中、一人の男が動き出した。それに便乗するように200人の男が神凪に向かっている。

神凪はこの状況でも焦りの一つもない。なぜならコレは日常茶飯事に起きた出来事であり、神凪はいつも一撃でこの状況を打破している。

そう…つまりコレはお決まりの死亡フラグなのだ。

毎日繰り返されるこの作業。もちろん琴音も好きでこんな状況を作つてはいるわけではない。そもそも発端の原因はこの学園の会長にある。

「午前8時に2年の神凧を倒したものには嫁にしてヨシ。」

「などと言つ意味不明な宣言をされた時、私は偶然お茶を飲んでいたのだが、そのお茶も漫画の世界みたいに盛大に吹いてしまった。今はまだ良くなつたほうだ。宣言の次の日の8時は学園の男子ほぼ全員が集まつてかかつて来たのだ。あれは身の毛もよだつ体験だつた…なんていうことは無くその時も一瞬で勝負は着いていた。そして、今日も。」

「紺歐（クラビ）… 1の陣（ティーショーン）」

神凧の詠唱と謳歌の一振りで半径数10mの地面が神凧の周りだけを除いてどす黒く変色し、その刹那、世界が反転したかのような凄まじい衝撃音が遅れて学園中に響いた。そして辺り一面に群がる死体…ではなく、加減していたので全員氣絶ただけだった。

「いや～毎度の事ながらお見事。」

「…会長ですか。」

後ろで手を叩きながら琴音に近づいてきた。何時ものとこだからか琴音はそのやり取りにウンザリした様に話しかけた。

「そろそろこんな事止めにしませんか？無意味ですし。」

「そうかい？この光景は見てても飽きないよ。」

琴音は後ろを見ると先程倒した男子生徒たちの屍（死んでない）がどんどん片付けられていく。学園の掃除屋とも言われている『スカイキーパー』の連中だ。

彼等の特徴はきわめてシンプルに刃である。

全身黒で覆われていて額にSKの文字。

これだけだった。だが逆を言えば…

そ れ だ け し か わ か ら な い 。

何しろ彼等の出現は最近は神凪が男子生徒達を倒す際に倒れてある学生を介抱する為毎日のように見るが、彼等の目的や人数、隠れ場所等一切が分かっていない。この学園の七不思議の一つに上がっている程だ。もっとも会長と何か繋がりがあるのは見え見えなのだが。

「これ以上は無意味でしょう？今日で終わりにさせてしまおう。」

「そうだねえ…今日で丁度10日だっけ。」

勿体つけるように会長は考えている。いや、これは…

考へてゐる振りをしているだけ。それは露骨で誰にでも分かるような仕草だった。

「じゃあ、明日で最後にしよう。」

ほら来た。どうせ悪巧みを考えてるんだね。神凪は冷静に対処する。

「明日も今日みたいな事を？結果は変わらないと思いますが？」
そう。この10日間そうだった。如何に大人数でかかって来ようと
も神凪の剣技で全てねじ伏せていた。学園で彼女に敵う物は居ず、
何時しかゝ女帝くの称号を持つまでになつた。

会長もそんな事は百も承知で言つていい筈。一体何をしようとしているのか。

「そうだねえ。でも明日はどうかな？」

「…何が言いたいのですか？」

会長の言いたい事が全く理解できない。まさか…

「会長が相手になるとでも？」

「僕が…まさか…だって」

如何にも会長は心外だと言わんばかりに言い放つ。

君とじゃあ相手にもならぬよ？

凄まじい殺氣に神凪は恐怖した。彼女が女帝なら会長は「皇帝」と言える。この学園では最も強いものが会長の座を手に入れることが出来る。

会長になると2つの特権が与えられるらしい。

一つは絶対宣言。これは校内放送で使用が出来るのだが会長自身がある宣言をし、条件が満たされれば必ず実行される絶対特権。（噂ではこれに逆らうとスカイキーパーの登場とか…）もう一つは不明。これは会長自身にしか知らされていない特権らしい。

そんな会長だからか、殺氣一つだけで相手を殺せるのではないかと神凪は思つ。もっとも表面上だけは冷静さを保とうと努力していた。

「…では誰が？」

辛うじて短く言つと会長は殺氣を消した。

「明日は僕が連れてくる。一人。」

「一人？誰ですか？」

神凪の言葉を聞いて会長は薄ら笑いを浮かべながら答えた。

「今年入学した1年生の伊吹って奴だよ。彼とは既に話をつけてあるから。」

そう答えると会長はじゃあまたねと去つていった。

「伊吹…？」

聞いたこともない名前だった。しかし相手が誰であれ負けるわけにはいかない。

「明日で終わる…終わらせる。」

神凪は拳を握り締め、堅く決意したかのように空を見上げた。

そう。明日の朝8時で最後の戦いになるのだから。一人でも容赦は

しない。

何故ならそれは会長の使者だからだ。

時間は8時10分を指す手前だった。

第四話 決戦日前日 伊吹誠

2009年4月6日 場所 夕凪学園屋上 13:00

午前の授業が終わり、学生の貴重な休憩時間に突入した。4月とはいえたまだ肌寒いのか、いつもなら屋上で昼食を食べる学生も多いのだが、今日は居なかつた。

そんな中、一人昼食も食べずに遠い景色を眺める男子学生が居た。

伊吹 誠である。

「カリン、どうだつた？」

誰も居ない屋上での独り言…のはずが

刹那の瞬間に、まるで今まで私初めからココに居ましたよ?的なオーラを出しているんじやないかとさえ感じさせれるかのように誠の左隣に居た。

「ごめんなさい…まだはつきりとは。」

「そうか。」

大して期待していなかつたのか。誠は背伸びしながら答えていた。
「でも…間違いなくあの人のはずなんです。」

証拠はないが確信はある。と言つた感じでカリンは小さな声で答える。

「そうだな…俺もそう思つ。」

だが証拠がない。

うなだれるように誠が呟く。

「カリン。分かっているとは思つが…。」

「ええ。分かっています。…もつ時間が無いのですよね。」

「…そうだ。」

九年前のあの事件以来、誠は全てを失つたといつてもいい。
最愛の家族を失い、友人や知人は全員未だ行方不明になつてゐる。
今まで誠は天涯孤独に生きてきた。その誠が今まで誰にも言わず、
忍ばせたたつた一つの執念。

あの事件の黒幕を探して殺す。

政府は、自然災害であると報告しているが、被災者である誠からみ
ればこれは明らかに人災であつた。（ただ、9年経つた今でも事件
の原因は掴めていない）

誠はこの9年間、ある魔術師の下で鍛錬してゐた。しかし魔術師が
言うには、誠には魔術としての才能があまりなく、使える魔術もわ
ずかに二つだけ。

一つ目は、自身又は物理的なものの一時的強化。戦闘では唯一使え
る基本スキルだが持続硬化時間がわずかに数十秒程度。とてもでは
ないが使える能力とはいえない。

二つ目、は未来予知。といつても数年後の未来を予測したりとかで
はなく、現在の状況から脳内で高精密演算を行い、その未来を読み
取るといった仕組み。

もう少し分かりやすく捕らえてみよう。歩いている一般人が居ます。
当然右足、左足と交互に足は出ます。右足が前に出てその次の行動
を読み取る…これが基本的な未来予知である。

しかしこの二つは他の魔術師にはほとんど修得しないものである。
なぜなら

強化の効果時間の短さと予知に関する脳内の負担とそのリスクが高
いため。

強化も未来予知も個人差があるものの、持続時間が圧倒的に短いた

め魔術師同士での戦闘になるとそれは邪魔な能力でしかない。予知に関しては、効果平均時間はわずかに数秒先の先読み程度しかない。なぜ師匠がこの能力しか教えてくれなかつたのだろうかと、誠は今でも師匠のことが理解できなかつた。

当然独学でも勉強しようとはした。しかし魔術の独学は非常に危険であり、師匠にも禁止されていた。

「（よく、ぶつ殺すつて言われてたっけなあ）

「…？」

何か寂しそうに空を眺める誠をどうしたものかとカリンは誠を見ていた。誠はそんなことなど知らぬ顔して聞いてみた（勿論内心では気付いているが）

「なあカリン…聞いてもいいかな？」

「…なんでしょうか？」

一呼吸して落ち着いてから、誠は本題を振った。

「俺は…勝てると思うか？」

カリンはわずかに示唆するが

「それは、どちらとですか？」

「決まっているだろう。」

誠はカリンの方に振り向いて答える。その時日の光が反射してすこし眩しかつた。

「会長とだよ。」

カリンにはどう答えていいのか迷つていたところ、正直に答えてと誠は言った。それなら…。

「正直、誠さんに勝ち田はありません…。」

やつぱりか。と誠は薄笑いしながらカリンに背を向ける。

「の人を遠くから見ましたが凄まじい殺氣でした。多分、私も気付かれます…。」

カリンは靈体のため、通常は他人に認知されない筈だ。その彼女に

氣付かれている？

ありえない。

会長が如何に入外の能力があつとも彼女はこの世に存在して居ない靈体なのだ。

誠でさえカリンが声を発しなければ、居場所さえ分からぬといふのに、会長は氣付いている？

「カリン一つ聞きたい。もし俺が神凪と組めばどうだ？」

背を向けてるので表情こそ見えないものの、少し苛立ちの声を出した。

「ひじきめに見ても…勝てないと思います。」

神凪はこの学園で2番目に強いとされる「女帝」だといふのにそれでも勝てないと呟つ。

それほど会長との力の差が歴然なのか。

「カリン。なら、俺と神凪とはどうだ？」

「私の力を使つても勝てるかどうか…です。」

つまり良くて5分、悪くて3～4と言つたところらしい。

「ならば、神凪に勝つて同盟し、仲間を増やすのが得策か。」

神凪と組んでも勝ち目が薄いのなら、人数を増やすしかない。単純な考えだが最も効率がよく、勝つ確率も上がる。

「カリン行くぞ。神凪と交渉してみる。」

カリンは黙つて誠の後ろに憑いてつた。誠の手を指す先がどれだけ困難であるか、カリンは一番分かつていた。

それはまるで死に行く傷ついた戦士を思い浮かべるようだつた。

その時、休憩時間が終わりを告げるチャイムが鳴つた。

第四話 決戦日前日 伊吹誠（後書き）

今回で新単語がどんどん出ていきます。

誤字、脱字、句読点、ストーリー上おかしいぞ？等変なところがあれば教えてもらえると幸いです。

第五話 決戦前日 会長の思惑

2009年4月6日 夕凪学園 生徒会室 14:00

「これより特別緊急会議をする。」

緊迫した声が走る。会議の参加者は5名。

会長を初め、副会長や会計、書記、生徒会担当顧問の5人だ。

「会長。今回の議題を聞いていないのですが…」

緊迫したムードの中、副会長が伺う。

「…单刀直入に言おう。例の計画に支障が出る可能性が出た。」

その言葉が出た途端、全員に緊張が走った。そんな中副会長は冷静に疑問を述べる。

「会長。神凪の件ですか？確かに彼女の実力は相当のもの。しかし、会長からみれば対した障害にもならない筈ですが。」

「…その通りだ。しかし今回は彼女の時とは次元が違う。」

「…まさか会長。見つかつたとでも？」

「そう。生き残りが見つかつた。」

その瞬間生徒会室の空気がより一層重くなつた。普段軽々しい会長も嫌な空気を発している程だ。

「で、誰なんですか？会長。」

「伊吹誠だ。今年入学してきた奴だ。」

「伊吹…何故彼だと？」

全員が分からぬと言つた感じで問う。会長は少し呆れたようなしぐさをして

「何故だと？お前たちは伊吹誠の入学時のデータを見たのか？」

「…と数枚の紙が役員の手元に来る。その紙を見ても会長の思惑が分からぬ。」

一見するとその紙は普通の履歴書と同等程度のデータでしかない。

「一体コレが何だというのだらうか。

「会長、まさか…。」

突然立ち上がり、副会長はそこまで言つと、有り得ないだらうと自問自答していた。

「…いえ、なんでもないです。」

「…？」

どうも副会長は何か心当たりがあるらしいが、何か突拍子も無いことのようだ、ここは黙つて引き下がつた。

「で、会長。どうします?」

「…ん? どうするとは?」

顧問の発言に会長は思わず聞き返してしまつた。まさかとは思つがコイツ - - -
「だから」

どうやつて殺すのかと聞いてるんです。

やはりコイツは使えない。この顧問は思考があまりにも短絡過ぎるところが駄目なのだ。ソレが出来るのなら、とっくに殺つていると言つのに。

「まだ殺せない。しばらくは様子見だ。」

「何故ですか?あの時の生き残りでしょうか?今処分しなければ大変なことに - - -

「勘違いするな。これは命令だ。」

一瞬で凄みを効かせて顧問を黙らせた。確かに事情を話せばいいのだが、この顧問にはそこまでの信用と実績がない。逆にコイツに話せば相手側にどう影響するかもわからない。

「…もう時間が無いから話は以上だ。今日はもう解散しろ。話はまた後日連絡する。」

相変わらずの凄みで各役員を急いで退散させる。…副会長を除い

て。

「会長。まさかとは思いますが。」

全員が帰ったのを確認し、数秒時間を置いてから話し出す。

「…副会長の思つている事で正解だ。」

全て分かつている。もつ話をなくともいいと言わんばかりに、投げやりに話を切る。

つまりはイラついているのだ。先程の顧問とのやり取りに…。

「では会長。最後に一つだけ。何か障害があるのでですね？」

副会長は言葉を選んで会長に話をする。当然だ。これで何故殺さないのかと聞いては顧問の一の舞…いや、虫以下だろう。

「ああ。一つだけ厄介な存在がな。」

会長は一瞬だけ躊躇つたが、副会長との信頼は厚いのか、話し始めた。

「伊吹誠にはな…代神^{カミシロ}が憑いてるんだ。」

「なんですって！！」

冷静沈着な副会長が、声を荒げて会長に尋ねる。無理もない。

代神とは古くから神々の使いとされ、崇められ、恐れられていた存在である。

現在では世界国際機関で認定された少数の魔法使いにしか代神は居ない。

代神はそもそも魔術師との契約で結ばれた相棒^{パートナ}であり、魔術師の能力の強化や弱点の補助、戦闘の前衛として使役される聖靈^{せいれい}である。会長は以前に代神と一度だけ戦つたことがあるが、結果は惨敗だった。剣術、魔力共に桁外れだった。そんな会長だからカリンを見て（実際は霊体だが、会長の魔力で見えていた）理解したのだろうか…

あの女は以前あつた代神と同じ雰囲気を纏っていた。

伊吹誠自身に対した能力^{スペック}が無くとも彼女が前衛で来れば状況はこ

ちら側が圧倒的に不利になってしまつ。というよりも。

そもそも相手にならない一方的な戦いでしかない。

会長の恐れている最悪に事態がまさしくそれだ。迂闊に手を出せない。最悪の事態だけは避けなければいけない。だが、伊吹誠を生かしていっては当面の計画に支障が出る可能性があるもの確かだ。

「俺は一度戦つたことがあるのはお前も見たな。」

「…ええ。私も正直、代神がアレほどとは思いませんでした。」

副会長の辛辣な顔が、まるで先程まで代神と戦つていたかのような思わせぶりだったが、事実間違いでもない。

会長はつい1ヶ月前まで戦つていたのだ。副会長も前衛で居たが、ものの数秒で気絶という結果。事の顛末は会長から聞いた次第だ。お互い言わなくても分かつているだろうか。数刻後、副会長は黙つて部屋を出た。

会長はこの件については様子見で保留にした。しかしその結果が伊吹誠に幸運を運んだ。

実際はカリンにそこまでの能力はない。彼女の能力は「増幅」にある。

伊吹誠が闘い、カリンが誠の能力を增幅させて戦うのだが、これには大きな弱点がある。

1対1でしかこの能力は活かされない点である。

集団で来られると完全にアウトだ。カリンが狙われると負けだし、靈体化してしまえば誠に増幅が出来なくなる弱点があるが、当然会長には知らない。

会長側からしてみればこの判断は大きな間違いだった。もし、すぐ誠と対峙していたらあっさり会長が勝つていただろう。それほど戦

力差があつたのだ。この時、絶対的な優位を持つていた会長側は僅かにではあるが、形勢が均衡状態になるかのように少し誠側に傾きました。

しかし、まだ会長の勝利は堅い。如何にカリンの能力が不明でも対峙してしまえばそれまで。

おそらくその瞬間会長なら見極められる。その為の明日の神凧との試合を組んだのだ。

誠からしてみればこれはまだまだ不利な状況だ。カリンの能力が完全に把握されたとき、誠が死ぬときなのだから…。

そして、運命の朝がやってきた。

第五話 決戦前日 会長の思惑（後書き）

最近仕事が忙しく更新出来ていらない状況です（言い訳）
長い話になると思いますのでまたたり見てやってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8387e/>

その瞳に映る先に

2011年1月1日02時08分発行